

祭礼の危機と担いの仕組み

—担い手不足へのコミュニティの対応—

日本学術振興会特別研究員 PD・立教大学 金子祥之

1 目的

本報告では、現代社会にも適応的な仕組みであるとされている輪番制の神事が、何ゆえに祭礼の維持困難を招く結果となっているのかを明らかにする。このような目的を掲げていることからわかるように、本報告で議論する祭礼の危機とは、担い手不足による祭礼の維持困難である。

民俗学が明らかにしてきたように、ひと口に祭礼といっても、その祭祀形態には、地域によって様々な形態が存在する。これらのうち、あるものは近代化に不適合な側面をもっていた。たとえば特定の家だけが参加可能な祭祀組織は、大きく変容を迫られた（たとえば、福田アジオ 2002 など）。

他方で、近代化に適合的な祭祀形態も存在していた。とくに輪番制の祭祀組織は、農山漁村の祭礼のみならず、都市祭礼のケーススタディにおいても、今日的な視点から合理的な祭祀形態であると評価されている。「氏子住民の意志を尊重し、彼らの意欲と工夫を引き出すようにすべきであるとすれば、輪番制が最も妥当なシステムの一つになる」（小松秀雄，1994）。

本報告で対象とするのは、千葉県栄町で実施されているオビシャ行事であり、輪番制で運営されている祭礼である。しかもこの行事は、単純な輪番制ではなく、トウヤ制と呼ばれるより徹底された平等原理に基づいて運営されている。ここで言う「『トウヤ制』とは、基本的には村落運営や社寺祭祀などの種々の役割が、村内において家々を輪番制で廻るようなシステムを指し、その意味では、村人の機会や負担を平等に分け与える民主的な制度である」（八木透，2011）。結論で検討するように、「民主的」という表現が妥当であるかどうかは議論の余地がある。だが、少なくとも、この祭礼の伝統的な祭祀形態は、新たな時代に適合的な要素をもっていたことがわかる。

しかし、このような肯定的評価にもかかわらず、いまオビシャ行事は祭礼の維持困難に直面しているものが少なくない。地域社会の人口が減少しているわけではなく、しかも平等原理を内包するオビシャ行事が、何ゆえに担い手不足に悩むことになっているのだろうか。

2 方法

本報告では、歴史的なアプローチをとる。とくに中心となるのは、祭礼の執行に支障が生じ始める昭和 40 年代（1965-1975）から現在までの約 50 年間である。具体的な分析内容は、問題が生じ始めてから現状の祭祀形態に至るまでの、地域社会の意思決定プロセスである。そこで分析方法としては、さまざまな矛盾を抱えながら地域自治会が祭礼を存続させるために、どのような戦略を用いてきたのかを、聞き取り調査および地域自治会が所蔵する資料をもとに分析することになる。

3 結果・結論

地域社会が直面する担い手不足は、地域住民であるにもかかわらず、祭礼を必要としない「内なる他者」の生成により生じていた。住民であるからといって、かつてのように自動的に祭礼に参加するわけではない。「内なる他者」の生成は、祭礼の維持において危機的な状況を生み出している。

こうした現状に対し、地域自治会が採ったのは、負担軽減を中心とした祭礼の合理化であり、「実情に即した」民主的な祭祀形態の構築であった。祭礼の合理化・民主化はたしかに必要であったが、しかしそのことが新たな担い手不足を招いているように見受けられる。また新たな運営原理は、この祭礼がもっていたトウヤ制とは異なっていることにも注意したい。そこで最後に、トウヤ制とはどのような原理であったのかについてあらためて議論する。

文献

小松秀雄，1994，「生田祭の社会学的研究(1)」『論集』 41(2)

福田アジオ，2002，『近世村落と現代民俗』吉川弘文館

八木透，2011，「トウヤ祭祀と宮座」『国立歴史民俗博物館研究報告』(161)